
潮騒。惑ふ夜に

GAS=MASK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潮騒。 惑ふ夜に

【Nコード】

N7672H

【作者名】

G A S Ⅱ M A S K

【あらすじ】

古びた研究所に住まう年齢不詳の女、夏夜。その部下、慶人。二人はそれぞれの真実を求めて事件に巻き込まれていく。ライトノベル風ミステリー……になる予定。

プロローグ

プロローグ

それは差し詰め“死”の投影だった。

ヒトが線香花火に魅入るのは、その小さな炎に自己を投影してしまっただけという。

色鮮やかに花ひらくが、しだいにしぼみ……最後には落ちてしまっただけ。

その刹那に自分自身の人生を重ね合わせてしまっただけ。

悲鳴。

嗚咽。

叫喚。

全ての音が癪に障る。

五月蠅い。

まるで頭の中で蓮華院誕生寺の大梵鐘を打ち付けられているような気分だ。

五月蠅い。

止めなければいけない。

一刻も早くこの音を消さなければならぬ。

どうすればいい？

どうすれば聴こえなくなる？

吐きそうだ。

胃液すら出し尽くしたというのに。

耳を塞ごうか？

……意味はない。

聴こえなくなるほど遠くに行こうか？

……それは選べない選択だ。

ならばどうすればいい？

……決まっている。

音の原因を壊してしまえばいい。

じゅっ、と音がして、光が失われた気がした。

聞こえてきたものがある。
それは詠うように。

何者であるべきなのか、
そこには是非もなく、諦念ていねんだけが唯ただたゆとうのみである。
歓喜であった。

憐憫れんびんであった。

白露しらつゆに濡れる雌雄しゆうの番つがいが喰い合う様を、
冴え冴えと見る自我に
惚けたように。

斗酒なお辞せずとも憂いは晴れず、失笑を誘う。
己が半身をこそぎ取った代償は決して小さくは無く、
喪失したことを気付かせる。

元来受けるはずのない凝こじった苦痛、
深く望んでしまった為に、
深く愛してしまった為に、

止め処なく落ちてゆく疑念が全てを朽ちさせる。
過去への憧憬は既に失墜してしまっただ。
そう、すべては

潮騒。 惑ふ夜に

「第一話「四次元遊戯」

怪物と闘う者は、その過程で自分自身も怪物になることがないよう、気をつけなければならない。

深淵を覗き込むとき、その深淵もこちらを覗いているのだ。

フリードリッヒ・ニーチエ

—

僕は音もなくゆっくりと瞼まぶたを開く。

何か悪い夢でも見ていたのだろうか……？

汗でびしょびしょに濡れたシャツが素肌に張り付き、気持ちが悪かった。

未だ呆ぼうとした意識の中、鬱屈した気分をかき消すように左右に頭を振る。

半身を持ち上げ、ガラス製のテーブルに乱雑に置いてある機械式の腕時計に見やると、時刻は一時三二分を指していた。

……どうやら少し寝すぎてしまったらしい。

もう壁の花に成り下がってしまった銀の腕時計は手入れが悪かったのか、毎日少しずつ進んでしまい、ほうって置けば時計としての役割を果たさなくなってしまう。

だからこのずれを直すのが毎朝の日課だ。

気だるい身体に鞭を打つてすぐ脇にあるパソコンの電源ボタンに手を伸ばす。

少し鈍い機械独特の音をだしてデスクトップが表示された。

その右下にある正確な日本の標準時刻に合わせるのだ。

ついでのようにメールボックスを確かめると一通の未開封のメー

ルが目に残る。

その内容を一通り読んでから……僕は深々と溜息をついた。

【僕】

「はあ……こんなんでやっていけるのかねえ」

この世にある確実に避けられないものは死と税だ。

今年で二四歳になった僕は最近それはもつともだと思つうようになった。

様々なモノから逃げてきたのだ。

恋人、家族、友人……。

元来、人が声も高らかに大切だというそれは、僕にとっては重要ではなかった。

必要ではないモノはいらない。

それはある意味誰にでも共通する真理だろう。

そして僕には人よりも必要ではないモノが多かった。

…それだけだ。

幸福な人生であったとは思わないけど、そのせいで不幸になったとも思っていない。

しがらみがない分、楽だとすら思う。

でもそれすらも結局、自分自身への言い訳なのかもしれないけど。

そんなことを、とりとめもなく思いながらも、メールの返信を終え、これからは今日を生きる為の仕事を始めなければならぬ。

ベッドと身体、その両方をぎしりと鳴らし立ち上がる。

【僕】

「どーせ起きてないんだろつなあ……」

誰に届くでもない呟きを、古く狭い安アパートの一室の中に漏らしつつ、身支度を始める。

安物のスーツと安物のつば付き帽子、それといつも中身の変わらない黒革の鞆を手に持つ。

軋む扉を開け、無骨な鉄骨の階段を降りる。

かつんかつん、と鉄を踏み、真夏の照りつける太陽の下にでると全身の汗腺から一気に汗が吹き出るのを感じた。

……どうにも夏つて奴は好きになれない。

僕は目をすがめながら目深に帽子を被りなおすと、再び歩き出した。

この安アパートの難点の一つ、それは駐車場までの道のりが無駄に長いということ。

なにせ専用駐車場なのにも関わらず、歩いて五分かかるのだ。

あるだけまじだろ、と言われるかもしれないが、こちらとしても駐車場を使うだけの代価は十分に払っているし、ここを借りる際はこんなに距離があるとは聞かされていなかった。

ただ広くて使い勝手がいいですよ、と言われたただだった。

たしかによく確かめなかった自分も悪いが、文句の一つも言いたくなる。

最近では引越しも考えているのだが、不動産屋に行つて部屋をまわつて契約して……それはそれで億劫だ。

まあ面倒くさがりの自分には結構お似合いなのかもしれない。

そんなこんなで自嘲していると、四六時中おかまいなしのセミの大合唱が嫌でも耳に入ってきた。

嫌いじゃないのだが、朝からは勘弁願いたい（正確には昼なのだが）。

やたらに騒がしすぎるBGMは気分を害する。

ようやく愛車にたどり着き、鍵穴にキーを差し込む。

無論これも例に漏れず中古の安いセダン。

エンジンをかけ、お気に入りの曲を垂れ流す。

最近ではもっぱら古いジャズだ。

わざわざレコードから音を抽出してプレーヤーに詰め込んでいる。

そしてエアコンは……壊れていた。

窓を全開にして走りなれた道をとばす事もなく二〇分。

目的地に到着した。

毎日、毎日……何故僕は足しげく此処こゝに来ているのだろう。

仕事だからしかたなく？

働くのが好きだから？

どちらも否。

おそらくこれは僕にとつての義務なのだ。

「葦辺研究所」とだけ書いてある看板が掲げられた三階建ての小汚いビル。

それが今の僕の職場である。

しかし、研究所とは名ばかりで、現状は殆ど機能していないと言つても差し支えないだろう。

何故なら職員は「葦辺研究所」の室長と僕、その二人しかいないのだから。

僕が働く前の話ではあるけれど、此処はかつて超弦理論分野において、その名を馳せた研究施設だったらしい。

物理学なんかとは程遠い世界の住人であった僕にはよくわからないのだが、なんでも室長である葦辺夏夜あしへかやは正式に学会で発表なり報告を怠ることなくきちんとしていれば、ノーベル賞でさえ取れていたのである。天才であり、その絶対的知性からくる権力は絶大で、逆らえる者などほんの一握りしかいなかったという。

……しかし、それも全て地に落ちた。

三年前、僕がここで働く二年ほど前、ある事件を境に全ては変わってしまったと聞く。

働いていた研究員は全て去り、もともと大学や他の研究施設とは関わりが殆どなかった葦辺夏夜は世界から一人取り残された。

そうして彼女は鼻つまみ者として爪弾きにされている。

いったい何があったのか……誰に聞けども口を閉ざし、真実は闇の中。

そんな場所に、給料なんか殆どもらえない状況でも、……僕はいる。

辞めてしまうのは簡単だ。

止める人間もいないだろう。

それでも僕は此処にいる。

やはりこれは義理ではなく義務なのだ。

そう感じたのはヒトという生物にわずかに残された動物としての本能みたいなモノなんだと思う。

それに元々人付き合いは苦手だったのだ、その点では非常に都合がいいし。

僕は不思議と笑みを零しながら、鞆からじゃらりと鍵束を取り出した。

しかし、扉の鍵を開け、ノブを引いた瞬間、その笑みは霧散した。

【僕】

「うわっ、換気ぐらいしろよ」

開け放たれた空間からはくぐもった熱気と生活臭があふれ出してきたのだ。

いつものこととはいえ目をそらしかけたが、気を取り直し室内へと足を踏み入れる。

黒の遮光カーテンによって日の光が入らないそこは真昼間まひるま*だといふのに部屋の主の心理の底を映したかのように闇が支配している。

感覚と慣れを頼りにカーテンを開き、窓を開ける。

そうしてようやくその人は姿を現すのだ。

【僕】

「夏夜、起きて下さい」

肩までかかる癖のない黒髪に太陽を嫌う彼女の肌は病的に白い。

「葦辺研究所」の唯一無二の主にして、僕、村上慶人むらかみけいとの上司である夏夜は床に薄いマットレスを敷いただけの場所で膝を抱えるようにして眠っていた。

【夏夜】

「う…うん……？」

【慶人】

「もうお昼ですよ」

夏夜はその大きな瞳も虚ろに、首の据わらない赤ん坊のように力ないまま静かに呟く。

【夏夜】

「ん……けい……」

【慶人】

「はい、慶人です」

【夏夜】

「…おはよ……お目覚めのキスは？」

芯の通ったアルト、まだ夢と現うつを彷徨っている様子だというのに夏夜の声には揶揄が混ざっている。本当にいつもこんな調子だ。

【慶人】

「そんなこと……したこともないでしょうが」

【夏夜】

「……………。まったく、つまらん。つれない男は嫌われるって知らないのか」

【慶人】

「はいはい」

いちいち相手をしていてはきりがない。
適当にあしらうが吉。

【夏夜】

「で、今何時だ？」

【慶人】

「十二時半です」

【夏夜】

「……………。あってるんだろうな、その時計」

【慶人】

「失礼ですね、あってますよ今朝あわせたばかりなんですから」

【夏夜】

「毎朝あわせなきゃならん時点で、その時計に信用性はないがな」

【慶人】

「……………。」

【夏夜】

「すまんすまん、悪かったよ。…………。コーヒー、頼めるか」

【慶人】

「ブラックで？」

【夏夜】

「いや、今日はミルクも」

【慶人】

「わかりました。……それと、服をちゃんと着て下さい」

シャツに下着だけの姿で夏夜は眠たい目をこすっている。

そんな姿にももう見慣れてしまったが、さすがに男として注意しない訳にはいかない。

彼女の実年齢こそ知らないが（本人曰く最高機密らしい）トップシークレット見た目は自分よりも年下に見える程なのだ。

恥じらいというものを少しは持って欲しいと常日頃言っではいるのだが、改める気はどうやらないらしい。

【夏夜】

「……ああ、シャワーを浴びたら着るさ」

【慶人】

「じゃあ、さっさと入ってきて下さい。コーヒーと朝食用意しておきますから、それと掃除もしなきゃいけないようなので……そこにいられると邪魔です」

【夏夜】

「んー……」

しかし夏夜はごく短い返事をしただけで、そこにゆらゆらと佇んでいた。

【慶人】

「んー、じゃないくて、動いてくださいよ!」

【夏夜】

「わかった、わかりましたよー。……まったく母親みたいな奴だな」

【慶人】

「何か言いましたか?」

【夏夜】

「いーや、なんでもない」

だらしない格好で大口を広げ欠伸あくびをしながらふらふら歩き始めた夏夜を尻目に、掃除を始めた。

今日もまた変わりばえのない日常が繰り返されるのだと、疑うこともせずに。

目視が出来ない。

その状況でヒトは根元的な恐怖を感じる。

暗闇だからだ。

眼前わずか一メートルの距離すら認識することができない。

男性の上肢長の平均は約七〇センチメートル。

つまるところ身を乗り出して搔くように手を伸ばさなければ自ら

の視覚を覗いた五感、

聴覚、

嗅覚、

味覚、

触覚、

その四感ではその程度を探るのが限界なのだ。

無論、聴覚や嗅覚の訓練でそれ以上の距離でも感知することは可能だろう。

しかし何の訓練も受けていない健常者の我々が唐突に視力を奪われるとどうだ。

おそらく、その七〇センチメートルすらも満足に把握することは出来ない。

何もわからない空間に手を伸ばすということ事態に畏怖するからだ。

頼るモノがなければ、その場で硬直、ないし地面に崩れ落ちるのが関の山。

それが、今の僕の状態。

【慶人】

「……………」

【??】

「……………」

沈黙が降りていた。

空気が凍りついていたと言い換えてもいい。

わかるのは、少なくとも僕からこの静寂を破ることはないということ。

【??】

「……なあ慶人」

やはり最初に口を開いたのは僕以外の誰かだった。

【慶人】

「……なんです？」

【??】

「だーれだ？って訊いたんだから答えるのが筋じゃあないのか？」

もう大体わかっているかもしれないが、有り体にわかりやすく状況を少し遡行するところだ。

夏夜が呑気にシャワーを浴びている間、掃除をしていた。

昨晚空けられたらしい散乱した缶ビール、饅えた臭いのするつまみ類、積み上げられた本の山。

その全てを処分、または元在った位置に戻し、バンカーズランプの似合う木製の机を硬くしぼった雑巾で拭く。

リノリウム張りの床にはひどく異質なマットレスを畳み、もはや倉庫となった実験室に運び込む。

そしてクツクルイパーで床を磨いていたときだった。

後ろから両の目を手で塞がれたのだ。
わかつていた。

僕の後ろをとって目に手を当てている誰かがドアを開ける音もしたし、足音を隠すつもりもない様子だった。

第一このビル内には僕以外には人間は一人しかいない。

あまつさえ、無理に作ったような甲高い声でだーれだ？という言葉をかけられては目も当てられない。

……実際に目は見えないのだが。
とにかく僕には茫然とする他ほかなかった。

【慶人】

「まあ……そうですが、この二人しか人間の存在していない室内で行われるべき行為ではないと思うのですが」

その僕の発言に興味を忘失してしまったのか、夏夜の手は短い溜息と共にずりりと下ろされ、瞳に光輝が取り戻された。

そして僕の横をいかにも遺憾だという様で通り過ぎ、僕が整えた本革の椅子に深々と腰掛ける。

【夏夜】

「わかつていてなおだ、さもわからない態ていを装い、やり通すのが人情つてもんだ。大体お前はノリが悪すぎる。仮にも私は上司だぞ？給料を払っているんだ、私を尊たごとび敬うやまい媚こび諂へつうのがお前の仕事だろ
うに」

夏夜という人間は時折こういったことを平気で言う。

多少ずれた事象だとしても、それが一旦正しいと信じると、萎縮することなく物怖じもしない。

【慶人】

「……先月と今月の給料をもらった記憶がないのですが。ちなみに私は健忘症でも若年性アルツハイマーでもありませんよ」

しかし、夏夜は目を泳がせた。

意外にもはったりや嘘、誤魔化しの類は苦手な人間なのだ。ポーカー、麻雀、花札、どれをやっても勝つ自信がある。というか実際負けたことがない。

【慶人】

「あー……夏夜室長」

いつまでも頬をポリポリと掻かせているわけにもいかない。生きるためには金がいる。つまり働かなければならないのだ。

【慶人】

「今日やるべきことはありますか？」

此处、「葦辺研究所」はすでに研究所として機能していない。どこからも研究資金は入ってこない。このビルを維持するだけで相当な費用がかかるというのに。

【夏夜】

「……いやあ、ないかなあ……」

夏夜はばつが悪そうに苦笑を浮かべるだけだ。

【慶人】

「では嫌でも働いてもらいますよ」

確かに物理学の世界ではもう夏夜に力はない。
信用や信頼を失ってしまった者の末路というのは袋小路に同義だ。
物理学者としての葦辺夏夜に未来はない。

【慶人】

「葦辺の名だけは未だ健在ですから」

だが、葦辺夏夜が優れた人間であることは決して揺るがないのだ。

【慶人】

「選ばなければ仕事はあります」

【夏夜】

「やる気でない……」

その子供のような我が侘を通すわけにはいかない。
選ばなければ仕事はあるのだから。

たとえそれが三流、四流、五流大学の講演であっても、金持ちの
息子の家庭教師であっても、迷い猫探しであったとしてもだ。

葦辺夏夜の知性を知る者は多く、頼る者も少くないのだから。

【慶人】

「今回の仕事は夏夜の母校でもある真雲学園の校長、阿部一誠さん
からの依頼です」

【夏夜】

「これまた古い馴染みの名前が出てきたもんだ……」

【慶人】

「……………」

阿部一誠は資料で年齢五四となっていたが、このヒトは五四歳と馴染みなのだろうか。

僕は夏夜の年齢に一抹の不安を覚えながらも話を続ける。

【慶人】

「どうやら最近学園の生徒の失踪が頻繁に起こっているそうで、二人の内は軽い家出かなにかだと高をくくって気にも留めなかったようですが、今では家出人捜索願が正式に受理されたものだけでも三四人。届けを出していなくても家にも帰らず連絡がとれない学園生が八人。警察も連続失踪事件として動いてはいるようですがなら重要な手がかりは掴めていないようです」

見ていた手帳から視線を夏夜に移すと、夏夜の顔色がやる気のない緩んだ表情から謹厳きんげんな表情へと変化していた。その鋭利な視線に射竦められる。

【夏夜】

「……それほどの事件がどうして新聞にもテレビにもでない」
「どうやら一瞬何も考えられない程、その剣呑な雰囲気きんげんに吞まれていたらしい。」

はっと思いついたかのように問いに答える。

【慶人】

「それは学園生が戻って来ているからです」

【夏夜】

「……続ける」

意外。

僕はてっきりここで更に喰いついてくるかと思っていたが、とうか喰いつくように答えたのだが。

【慶人】

「学園生は失踪後、ほぼ全員が五日〜八日の間に帰ってくるのです。それだけなら只の家出ですむのですが問題は失踪して帰ってきた学園生に何をしていたんだ？と訊くと返ってくる答えにあります。それは示し合わせたかのように同じで『首を捜していた』でした」

瞬間、僕はぎよつとせざるを得なかった。

夏夜が声を殺すように嗤っていたのだ。

【慶人】

「……………夏夜？」

【夏夜】

「いや、すまん。少々信じられなくな」

【慶人】

「まあ確かに僕もこの話を完全に鵜呑みにしている訳じゃありませんが……………まるでB級ホラーですからね」

【夏夜】

「私の場合は少し違う。信じられるのが信じられないんだ」

夏夜はよっぽど面白いのか、普段仕事の話なんてまるで興味を示さず聞き流して僕にその殆どを任せるくせに、狡猾な笑顔を覗かせつつも真剣に聞いているようだ。

【慶人】

「信じられるのが信じられない、ですか？」

【夏夜】

「ああ、その帰ってきた学園生達『四次元』とは口にしていないか？」

【慶人】

「え、ええ。確かにしています。四次元、異次元、異世界、幽世かくりよな言葉に差異はありますが、何処で？と訊くと大部分の者がそう答えています」

ついに夏夜はこらえきれなかったのか声を出して嗤いはじめた。

【夏夜】

「久々におもしろい仕事になりそうじゃないか慶人」

【慶人】

「そうですか…？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7672h/>

潮騒。惑ふ夜に

2010年10月9日01時30分発行